



TITLE:

ジョン・ロックの重商主義と経済循環理論(二)

AUTHOR(S):

平井, 俊彦

CITATION:

平井, 俊彦. ジョン・ロックの重商主義と経済循環理論(二). 経済論叢
1963, 91(4): 272-302

ISSUE DATE:

1963-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/132939>

RIGHT:

經濟論叢

第九十一卷 第四號

ダグラス型生産関数と分配率……………島 津 亮 二 1

社会主義経済学の生成と発展(→)……………木 原 正 雄 22

ジョン・ロックの

重商主義と経済循環理論(→)……………平 井 俊 彦 46

昭和三十八年四月

京都大學經濟學會

ジョン・ロックの重商主義と

経済循環理論 (二)

平 井 俊 彦

四 利子率と貨幣

われわれは前節で、第一次利子率論争のなかで、ロックの自然利子論をチャイルドの法定利子引下げ論に対決させ、いずれも重商主義的地平に立ちながらも、ロックが金融独占に対して、一般の貸付け資本家までもふくめ広汎な国民層の立場で発言し、いかにして経済的自由 economic liberty を要求したかをあきらかにしてきた。このばあい、問題となるのは、ロックがチャイルドとはちがつて、法定利子率引下げに反対して利子の自由放任を主張したという時論にとどまらず、すでにふれたように利子率をさらにその根底にまでほり下げて、貨幣の貸貸価格 price of the hire of money であると規定していることである。もとより、利子を貨幣の貸貸価格とみる見方は、ペティがすでにのべたところである。¹⁾だが、ロックにとって固有なことは、この貨幣が、ロック経済思想の体系の論理的中心をなすカテゴリーであつて、このカテゴリーをてこととして思想体系が動いているということ、より詳しくいえば、貨幣が外国貿易のみならず国内産業・商業をとらえ、さらに「勤勉」な諸階級を包摂し、貨幣の循環をと

おいて、イングラントの国富を担う階級像を生き、描いていることであろう。²⁾これをトレードの言葉の生成からいえば、トレードが外国貿易とともに国内の土地所有者・借地農をはじめ商工業階級にまで拡大したということであろう。ここに、貨幣がインダストリとトレードを完全に包摂したといえるであろう。この点こそ、さきの自然利子率の構想と結びつく点であつて、さらに『自然法論』における宗教的自由主義の階級的基礎であるとともに、のちの『政治論』へと連続する要素なのである。だが、ロックのこうした一國社会内部の経済循環理論も、その基礎には外国貿易による貿易差額説、theory of economic circulation があり、社会の経済表もけつして完結したものではなかつた。のみならず、経済循環はどこまでも貨幣の循環であり、けつして生産過程からの論理構成ではなかつた。ここにも、ロックの経済思想の二重構造がからみ合っているものであり、この矛盾した姿こそが十七世紀のブルジョワ経済思想の歴史的個性をしめしているのではないだろうか。

いうまでもなく、ロックの自然利子論はその基礎に、貨幣に対する需給関係をおいた。利子は法律によつて決めらるべきものではなくて、市場における貨幣に対する需要と供給との関係によつて決まるのであつて、利子が生ずるのは、トレードにたずさわる人々が貨幣不足 scarcity of money に悩んでいるからである。いうなれば、貨幣の不平等な分配のなせるわざであつて、一方において貨幣の剰余があり、他方で貨幣の不足が生ずるからである。とすれば、利子率を決定するために、その基礎にある貨幣の性格をあきらかにすべきであらう。ここに、利子率と貨幣との関係が生ずるのであるが、このばあい、いうまでもなく貨幣もまた重商主義理論の最も重要なカテゴリーであつた。ロックの貨幣論もまた、イギリス重商主義に伝統的な考え方、すなわち貨幣は素材的価値物であり、それは国富の象徴であるとの考え方から出発している。だが、同時に貨幣はそれ自体が富なのではない。もし、そう

だとすれば、重金主義となんら異ならないであろう。貨幣のうらがわには生産物があり、貨幣はつねに他の商品と交換されるから富なのである。「金や銀はごくわずかの人にしか役立たないけれども、それらはあらゆる生活の便宜品を支配するからそれらの豊富さが、すなわち富である。」³⁾このように、金銀それ自体からそれが生産物と交換される能力の方向に、はつきりと志向してきたことは、貨幣が交換手段であり、価値の担保であるとの考え方に基づいており、それはさらに、ト Reid⁴⁾によつてのみその本来の機能をはたすものとみられているからである。

ここで、ロックの貨幣論をより立ち入って考察してみよう。「ところで貨幣はこれらのすべての種類の人々にとって、計算者 counter および担保 pledge として役立つ。そして貨幣は、計算性と安全性をもっているから、それを受けとる人は、再びそれと引きかえに、自分の好きなときに自分の欲する、それと同じ価値をもつ他の物を手に入れることができるのである。」⁴⁾このばあい、貨幣はあきらかに交換手段であつて、他の生活便宜品を支配するから価値をもっているのであるが、だからといって、それは単なる名目貨幣ではなくて、それ自体が価値物だからである。したがつて、ロックは計算者および安全性とのうち、後者つまり保証物としての貨幣に重点がおくのは、思うに、当然の帰結であろう。「人類は金や銀に対し、それらが耐久性をもち稀少性をもち、偽造されにくいという理由から、想像的価値 imaginary value をあたえた。そこで人類は貨幣をば、一般的合意 general consent により、人々がそれと交換にそれに等しい価値物を確実に手に入れることのできる共通の担保 common pledge⁵⁾、さらにはこれらの金属のある量と引きかえに人々の手離す物に対する共通の担保としてきた。このことよつてみると、共通の交換物であるとされたその金属のなかに存在するとみられる真実価値 intrinsic value は、人々が与えたり受取る金属の数量がいのないものでもないということになるだろう。というのは、金属は人が必需品や欲求物を手に入

れる担保のほかに、貨幣としてなんの役にも立たず、その量のみによつて我々の必需品や欲求物を手に入れるのだから、商業で用いられる金銀の眞実価値は、まさしくその量にほかならないのである。⁵⁾「このようにみれば、貨幣はそれが生産物の交換を媒介する機能を果ただけに役立つようにもみえるのであり、したがつて名目的役目だけなら、手形や証書でも代用されるはずである。だが、ロックはやはり貨幣の素材的価値そのものを重視しており、他の物の代用はみとめない。「私がある人から受け取る手形、証書ないし借用書は担保として他人が受け取つてはくれない。なぜなら、彼は手形または証書が本物で合法的であることや、私に支払い義務のある人が正直で責任感のある人だとは知らないからである。こうして、手形や証書は通用担保となるのに充分の価値のないものであり、また証書譲渡のばあいのように、公の權威では通用担保とはなりえない。というのも、法律は人類の普遍的合意が金および銀にあたえたあの眞実価値を証書にあたえることはできないからである。」⁶⁾この点からのみみれば、ロックは通貨を手形や為替によつてある程度まで代用させる重商主義者たちより古い貨幣観をもつていたとみられはしないだらうか。というのも、すでに貨幣論のみに関するかぎり、すでに十六世紀の重商主義者、たとえばトーマス・グレッシャムは貿易や商業における手形や為替の役割や機能を評価しているのである。もつとも、信用貨幣をどの程度に評価するかという基準だけで、経済思想の性格を決められるものではない。それは経済理論全体のなかで地位づけられねばならないであらう。また、素材的価値を重視することそのことについても、重商主義の現代的意義をあらわすことになつても、単にその思想の古さをしめすものではない。だが、このことは相対的・歴史的にみて、一面でやはりロック貨幣論の未成熟さを意味する。ことに、外国貿易によつてのみ、国内に地金銀貨幣の導入を考え、この豊富なることを国富とみなす考え方と結びつくとき、いよいよこのことがいえるであらう。にもかかわら

ず、みられるように貨幣はそれ自体では役に立たないものであり、生産物を交換する用具であり、他の生活必需品を支配する共通の担保であり、価値尺度なのであった。

このように、ロックは利子率から貨幣へと深まるのだが、かれの経済思想の基本的カテゴリーであるこの貨幣観において、すでに相対立する諸要素をはらんでいたのである。だが、この考え方それ自体についていえば、ロックに固有のものではなく、すでに重商主義思想のなかではぐくまれていたといえよう。むしろ、重要な論点は、交換手段としての貨幣が、トレードとかかわらしめてとらえられ、しかも、貨幣を論理的起点として、外国貿易ならびに国内の社会全体にどのように循環するのかということ、しかもこの経済循環の過程のなかで、国富の担い手たる社会諸階級の姿をどのようににえがいているか、という問題なのである。極言すれば、ロックの貨幣論はこの経済循環を無視しては、なんの意味をもたないのであり、逆に貨幣の運動のなかから貨幣の本質がとらえられねばならないであらう。

- (1) Petty, W.: *A Treatise of Taxes and Contributions*, pp. 47. (大内・松川訳『租税貢納論』八三ページ以下)。ペティは租税とのかかわりですでに、「われわれは前述の土地や家屋の賃料はもとより、貨幣——その賃料をわれわれは貨幣賃料 money と呼ぶ——についても、それらの賃料の神秘的な性質をつとめて解明しておかねばならない」とのべてつぎのようという。「思うにある人が、自分自身どれほど必要を感じても、一定の期限がくるまでは返還を求めないという条件のもとに、自分の貨幣を貸し出したとすれば、かれは自分の意に反してこうむった不便に対して、弁償をとっても、けっしてさしつかえなかる。この料金を、普通われわれは貨幣賃料と称するのである。」なお、貨幣賃料としての利子概念の意義について、高木陽哉『利子学説史』一三六ページ以下参照。

- (2) ロックの経済思想のなかで、貨幣のもつ意味はきわめて重要である。普通、労働価値思想の形成上、きわめて特徴的な『政治論』においても、この貨幣が一つの理論的中心となっている。わたしは、「ジョン・ロックの市民社会像」(京都大学経済

学部創立四十周年記念、経済学論集)のなかで、この貨幣が、「政治論」と「経済論」とを結ぶ、結び目であることをしめした。(3) Locke, J.: *Some considerations of the lowering of interest and raising the value of money* p. 12. すでに、金銀それ自体が富ではなく、交換手段にすぎないことは、トーマス・マンの重商主義のなかにはつきりみとめられる。

(4) Locke, J.: *ibid.*, p. 22. 白杉教授は「ジョン・ロックの経済思想」のなかで、同じく貨幣論がきわめて重要な地位をしめることをしめされ、「その冒頭で、貨幣を普遍的商品 universal commodity であるとして、「交換の媒介物」と「普遍的価値尺度」の二重の機能から説明されている。このばあい、貨幣の数量をロックが問題としているといわれるがやはり、貨幣の素材的質が前提されていることを忘れてはなるまい。(彦根論叢、十二号、七ページ)。

(5) Locke, J.: *ibid.*, p. 22. 羽鳥氏はこのロックの貨幣観の側面について、「金銀姿態をとったまま流通過程に立ちあらわれて人間社会の保証物となる」とのべ、「質料的富の総体」としてとらえ、この面が『利子論』をつらぬくモティーフだとされているが、ロックにはたしかに、この面がみとめられる。(羽鳥『市民革命思想の展開』七〇—一ページ)ただ、この面が重商主義が古典主義かを判定する一つの基準とはなりえても、現代の貨幣理解についてこの重商主義の貨幣規定のもつ意味いかなは、また別の問題であらう。

(6) Locke, J.: *ibid.*, p. 22. ロックは上の考え方から、為替や手形の流通の意味、ことに担保としての価値をみとめない。この点に関するかぎり、それ以前の重商主義、ことにトーマス・マンなどの為替理解よりロックの方が古いとみなされるかもしれない。

(7) 注四でしめたように、貨幣の機能として「価値尺度」がある。ここではこの点についてふれるよりは、むしろ担保としての役割をのべた。もとより、前者の役割もまた重大である。ただ、この面については、ロックの次の言葉をとるのにとめておきたい。「貨幣はそれによって購買されるその他一切のものの価値の対重 counter-balance である。いわば、それは商業の反対の秤にあるものだから、自然の結果として、貨幣価値がなくなれば、それだけ、それと交換される他の物の価格がますますことになる、とおもわれる。ある物の価格の騰貴は、貨幣に關するその物の価格が増すことであり、あるいはおなじことだが、貨幣価値が減少することである。」Locke, J.: *ibid.*, p. 30.

五 貨幣とトレイド

いうまでもなく、ロックは貨幣からトレイドにすすんでゆく、というよりはむしろ、貨幣はトレイドをつつんでゐる。¹⁾「貿易は富裕の創出に、貨幣は商業の遂行に必要である。」

ここで、貨幣はトレイドに必要なものであり、トレイドの手段であるとともに、トレイドは二重構造つまり外国貿易と国内商業・産業の二段階をもっているということが、あきらかになる。すでにのべたように、ロックは貿易による差額が国富の源泉であるとの考えに基づいている。金銀が国富であるかぎり、鉱山をもたないイギリスでは、外国貿易によって貿易差額を拡大する以外に富裕への道はないであろう。というよりはむしろ、鉱山のない国の方が、つまり貿易差額による致富の方が重商主義体制にとってはすぐれている。「だれも、鉱山のみが金銀をあたえることは知っている。しかし、それとともに自然に鉱山をもっている国は、大てい貧困である。これら金属を採掘し精錬することは労働を取りあげ、国民の多数を消耗させるのである。……事実、物事を正しく考えると、鉱山から採掘される金銀は貿易によってえられるものと同様に、致富にはしないものである。……貿易こそは、熟練と勤勉で経営されるばあいには、富裕へのなよりの確実な近道である。」²⁾とすれば、イギリス国民こそオランダに伍して海洋マールカンティリズムの雄たるにふさわしい。こうして、貨幣を外国貿易によつて導入することが緊急の方策である、³⁾とともに逆に外国貿易には貨幣が必要であり、その前提なのである。ロックがチャイルドの法定利率率引下げに反対したのも、実は「利子制限法が貿易をはばむ」⁴⁾からであつた。つまり、「一定比率の貿易を営んでいくために、一定比率の貨幣が必要である」のに、利子を法定すれば、必ず貨幣が退蔵されて、貿易に使われる

ことがなくなるからである。

貨幣は貿易とからみ合いながら、さらにそれは国内市場へ循環する。ということは、トレイドは外国貿易からさらに国内商業および産業をつつんでいる。どのようにか。貨幣はトレイドをいとなむに必要なものであるとすれば、ロックには、国のトレイドを動かすに必要な貨幣数量がいくらかを算定することが問題であった。ここに、貨幣は質と量との両面から考察され、むしろ「金や銀の内在的価値は、その数量がいかにものではない」として、トレイドとの相対的数量こそが問われているのであった。しかも、ここでロックはその当時、国内のトレイドを動かすに必要な貨幣量を、労働者、借地農業者、商工業者、土地保有者および仲介業者について検討する。「トレイドにとって必要な一定比率の貨幣は、（わたしのおももの）つぎの点にある。すなわち、流通している貨幣は、それが水路にある（というの）はそう若干は不可避免的に静止せるプールに入るから）あいだ、トレイドのいくつかの車を動かすものであって、それらはすべて、原料を生産する土地の保有者、その原料を加工する労働者、それらを必要とする人に配分する仲介業者、商人、店主、およびそれらを消費する消費者の間に配分されるのである。」⁶⁾ロックの叙述する順序はこのとおりではないけれども、つぎのように貨幣必需量を算定している。「まず第一に、一般に手から口への生活をしている労働者 labourer。かれが労働者としてトレイドをするものと考えれば、事実、食物、衣類、道具を買うだけの貨幣を持っていれば、自分の役割を果たすに充分であらう。……したがって、かれらは普通一週間に一回支払いをうけるとしてかれらの間に、かれらの相互の間に、かれらに支払うべき人々の間に、たえず一週間の賃金が現金でなければならぬ。」⁷⁾労働者のトレイドには、わずかの貨幣しか必要でないけれども、借地農業者 farmer や商工業者 tradesman といえば、そういうわけにはいかない。すなわち、かれらは食物を

市場へ買いにいたり、他の商人の所へ道具を買いに行ったり、あるいは衣服を購入するのに、いくらかの貨幣が必要であろう。そのうえ、労働者を雇うための賃金を、少くとも一週間分のそれをもっていなくてはなるまい。

さらに、ロックは土地保有者について算定するが、このばあいこの階級とかれの土地を借りている借地農との間にある貨幣量が問題となる。つまり、土地保有者と借地農とのトレイドは地代であり、生産物が売れこれが地代として保有者に支払われるからである。四季支払い目を立前とするところでは、「保有者 *landholder* と借地人 *tenant* との間には、すくなくとも年収入の四分の一がたえず存在しなければならぬ⁸⁾。」ところが、一年に四回の支払い日が短縮されると、その間に退蔵される貨幣量は少くなり、したがって同一の貨幣量がより多くのトレイドに用いられるにちがいない。つぎにのべるように、ロックが貨幣流通説を展開し、そのなかで流通速度をもちんだのも、実はこうしたトレイドを前提していたからにほかならない。これはともかく、仲介業者 *broker* については、こうである。仲介業者は市場で商品を仕入れたり、六ヶ月目毎の指定日に支払いをするために、年収入の二〇分の一の貨幣が必要であり、その他の消費者 *consumer* つまりトレイドをおこなわぬ学者、婦人、賭ばく師、召使についても、いくらかの貨幣量が必要であろう。こうして「一国のトレイドをうごかすためには、どうしても労働者の賃金の五〇分の一、土地保有者の年収入の四分の一および仲介業者の年収入の二〇分の一がなければならぬだろう。…もし、この半分以上しかなければ、トレイドのいくつかの車輪 *wheel* を動かし、商業 *commerce* を維持し、こうして国家を生きづかせ繁栄させることは、考えられないだろう。ある国の現金がこの比率を欠いている程度におうじて、トレイドは貨幣不足のために損われ妨げられるのである。」⁹⁾

このようにして、ロックは社会諸階級それもトレイドを担う階級について、いくらの貨幣が必要であるかを算定

しているのであるが、このばあい重要なことは、ロックが第一次利子率論争の金融危機に対して、いかに少い貨幣
量で多くのトレイドをおこなわせるかという問題意識から、トレイドに必要な貨幣量を一般の商工業者および土地
保有者・借地農の間にいかに流し、こうして国富を維持し増大させるかということであつた。このことから、ロッ
クは貨幣数量説を提起しているのであり、また提起できたのである。たとえば、地代支払い期間を短縮することに
ついて、次のようにのべている。「毎週地代が支払われるとすれば、わずか二〇シリングで年五二ポンドの地代を支
払い、ここから二重の利益が出てくることにならう。つまり、一国のトレイドにはわずかの貨幣で事足りるし、死
蔵される貨幣が少くてすむのである。」とすれば、一国社会の必要貨幣量は、「トレイドに対するある比率の貨幣量
necessity of some proportion of money to trade を決定することは、困難である。なぜなら、貨幣の必要量は
単に貨幣量のみならず、その流通速度 quickness of its circulation によるからである。」¹⁰⁾ 11) 12) 13) 14) 15) 16) 17) 18) 19) 20) 21) 22) 23) 24) 25) 26) 27) 28) 29) 30) 31) 32) 33) 34) 35) 36) 37) 38) 39) 40) 41) 42) 43) 44) 45) 46) 47) 48) 49) 50) 51) 52) 53) 54) 55) 56) 57) 58) 59) 60) 61) 62) 63) 64) 65) 66) 67) 68) 69) 70) 71) 72) 73) 74) 75) 76) 77) 78) 79) 80) 81) 82) 83) 84) 85) 86) 87) 88) 89) 90) 91) 92) 93) 94) 95) 96) 97) 98) 99) 100) 101) 102) 103) 104) 105) 106) 107) 108) 109) 110) 111) 112) 113) 114) 115) 116) 117) 118) 119) 120) 121) 122) 123) 124) 125) 126) 127) 128) 129) 130) 131) 132) 133) 134) 135) 136) 137) 138) 139) 140) 141) 142) 143) 144) 145) 146) 147) 148) 149) 150) 151) 152) 153) 154) 155) 156) 157) 158) 159) 160) 161) 162) 163) 164) 165) 166) 167) 168) 169) 170) 171) 172) 173) 174) 175) 176) 177) 178) 179) 180) 181) 182) 183) 184) 185) 186) 187) 188) 189) 190) 191) 192) 193) 194) 195) 196) 197) 198) 199) 200) 201) 202) 203) 204) 205) 206) 207) 208) 209) 210) 211) 212) 213) 214) 215) 216) 217) 218) 219) 220) 221) 222) 223) 224) 225) 226) 227) 228) 229) 230) 231) 232) 233) 234) 235) 236) 237) 238) 239) 240) 241) 242) 243) 244) 245) 246) 247) 248) 249) 250) 251) 252) 253) 254) 255) 256) 257) 258) 259) 260) 261) 262) 263) 264) 265) 266) 267) 268) 269) 270) 271) 272) 273) 274) 275) 276) 277) 278) 279) 280) 281) 282) 283) 284) 285) 286) 287) 288) 289) 290) 291) 292) 293) 294) 295) 296) 297) 298) 299) 300) 301) 302) 303) 304) 305) 306) 307) 308) 309) 310) 311) 312) 313) 314) 315) 316) 317) 318) 319) 320) 321) 322) 323) 324) 325) 326) 327) 328) 329) 330) 331) 332) 333) 334) 335) 336) 337) 338) 339) 340) 341) 342) 343) 344) 345) 346) 347) 348) 349) 350) 351) 352) 353) 354) 355) 356) 357) 358) 359) 360) 361) 362) 363) 364) 365) 366) 367) 368) 369) 370) 371) 372) 373) 374) 375) 376) 377) 378) 379) 380) 381) 382) 383) 384) 385) 386) 387) 388) 389) 390) 391) 392) 393) 394) 395) 396) 397) 398) 399) 400) 401) 402) 403) 404) 405) 406) 407) 408) 409) 410) 411) 412) 413) 414) 415) 416) 417) 418) 419) 420) 421) 422) 423) 424) 425) 426) 427) 428) 429) 430) 431) 432) 433) 434) 435) 436) 437) 438) 439) 440) 441) 442) 443) 444) 445) 446) 447) 448) 449) 450) 451) 452) 453) 454) 455) 456) 457) 458) 459) 460) 461) 462) 463) 464) 465) 466) 467) 468) 469) 470) 471) 472) 473) 474) 475) 476) 477) 478) 479) 480) 481) 482) 483) 484) 485) 486) 487) 488) 489) 490) 491) 492) 493) 494) 495) 496) 497) 498) 499) 500) 501) 502) 503) 504) 505) 506) 507) 508) 509) 510) 511) 512) 513) 514) 515) 516) 517) 518) 519) 520) 521) 522) 523) 524) 525) 526) 527) 528) 529) 530) 531) 532) 533) 534) 535) 536) 537) 538) 539) 540) 541) 542) 543) 544) 545) 546) 547) 548) 549) 550) 551) 552) 553) 554) 555) 556) 557) 558) 559) 560) 561) 562) 563) 564) 565) 566) 567) 568) 569) 570) 571) 572) 573) 574) 575) 576) 577) 578) 579) 580) 581) 582) 583) 584) 585) 586) 587) 588) 589) 590) 591) 592) 593) 594) 595) 596) 597) 598) 599) 600) 601) 602) 603) 604) 605) 606) 607) 608) 609) 610) 611) 612) 613) 614) 615) 616) 617) 618) 619) 620) 621) 622) 623) 624) 625) 626) 627) 628) 629) 630) 631) 632) 633) 634) 635) 636) 637) 638) 639) 640) 641) 642) 643) 644) 645) 646) 647) 648) 649) 650) 651) 652) 653) 654) 655) 656) 657) 658) 659) 660) 661) 662) 663) 664) 665) 666) 667) 668) 669) 670) 671) 672) 673) 674) 675) 676) 677) 678) 679) 680) 681) 682) 683) 684) 685) 686) 687) 688) 689) 690) 691) 692) 693) 694) 695) 696) 697) 698) 699) 700) 701) 702) 703) 704) 705) 706) 707) 708) 709) 710) 711) 712) 713) 714) 715) 716) 717) 718) 719) 720) 721) 722) 723) 724) 725) 726) 727) 728) 729) 730) 731) 732) 733) 734) 735) 736) 737) 738) 739) 740) 741) 742) 743) 744) 745) 746) 747) 748) 749) 750) 751) 752) 753) 754) 755) 756) 757) 758) 759) 760) 761) 762) 763) 764) 765) 766) 767) 768) 769) 770) 771) 772) 773) 774) 775) 776) 777) 778) 779) 780) 781) 782) 783) 784) 785) 786) 787) 788) 789) 790) 791) 792) 793) 794) 795) 796) 797) 798) 799) 800) 801) 802) 803) 804) 805) 806) 807) 808) 809) 810) 811) 812) 813) 814) 815) 816) 817) 818) 819) 820) 821) 822) 823) 824) 825) 826) 827) 828) 829) 830) 831) 832) 833) 834) 835) 836) 837) 838) 839) 840) 841) 842) 843) 844) 845) 846) 847) 848) 849) 850) 851) 852) 853) 854) 855) 856) 857) 858) 859) 860) 861) 862) 863) 864) 865) 866) 867) 868) 869) 870) 871) 872) 873) 874) 875) 876) 877) 878) 879) 880) 881) 882) 883) 884) 885) 886) 887) 888) 889) 890) 891) 892) 893) 894) 895) 896) 897) 898) 899) 900) 901) 902) 903) 904) 905) 906) 907) 908) 909) 910) 911) 912) 913) 914) 915) 916) 917) 918) 919) 920) 921) 922) 923) 924) 925) 926) 927) 928) 929) 930) 931) 932) 933) 934) 935) 936) 937) 938) 939) 940) 941) 942) 943) 944) 945) 946) 947) 948) 949) 950) 951) 952) 953) 954) 955) 956) 957) 958) 959) 960) 961) 962) 963) 964) 965) 966) 967) 968) 969) 970) 971) 972) 973) 974) 975) 976) 977) 978) 979) 980) 981) 982) 983) 984) 985) 986) 987) 988) 989) 990) 991) 992) 993) 994) 995) 996) 997) 998) 999) 1000) 1001) 1002) 1003) 1004) 1005) 1006) 1007) 1008) 1009) 1010) 1011) 1012) 1013) 1014) 1015) 1016) 1017) 1018) 1019) 1020) 1021) 1022) 1023) 1024) 1025) 1026) 1027) 1028) 1029) 1030) 1031) 1032) 1033) 1034) 1035) 1036) 1037) 1038) 1039) 1040) 1041) 1042) 1043) 1044) 1045) 1046) 1047) 1048) 1049) 1050) 1051) 1052) 1053) 1054) 1055) 1056) 1057) 1058) 1059) 1060) 1061) 1062) 1063) 1064) 1065) 1066) 1067) 1068) 1069) 1070) 1071) 1072) 1073) 1074) 1075) 1076) 1077) 1078) 1079) 1080) 1081) 1082) 1083) 1084) 1085) 1086) 1087) 1088) 1089) 1090) 1091) 1092) 1093) 1094) 1095) 1096) 1097) 1098) 1099) 1100) 1101) 1102) 1103) 1104) 1105) 1106) 1107) 1108) 1109) 1110) 1111) 1112) 1113) 1114) 1115) 1116) 1117) 1118) 1119) 1120) 1121) 1122) 1123) 1124) 1125) 1126) 1127) 1128) 1129) 1130) 1131) 1132) 1133) 1134) 1135) 1136) 1137) 1138) 1139) 1140) 1141) 1142) 1143) 1144) 1145) 1146) 1147) 1148) 1149) 1150) 1151) 1152) 1153) 1154) 1155) 1156) 1157) 1158) 1159) 1160) 1161) 1162) 1163) 1164) 1165) 1166) 1167) 1168) 1169) 1170) 1171) 1172) 1173) 1174) 1175) 1176) 1177) 1178) 1179) 1180) 1181) 1182) 1183) 1184) 1185) 1186) 1187) 1188) 1189) 1190) 1191) 1192) 1193) 1194) 1195) 1196) 1197) 1198) 1199) 1200) 1201) 1202) 1203) 1204) 1205) 1206) 1207) 1208) 1209) 1210) 1211) 1212) 1213) 1214) 1215) 1216) 1217) 1218) 1219) 1220) 1221) 1222) 1223) 1224) 1225) 1226) 1227) 1228) 1229) 1230) 1231) 1232) 1233) 1234) 1235) 1236) 1237) 1238) 1239) 1240) 1241) 1242) 1243) 1244) 1245) 1246) 1247) 1248) 1249) 1250) 1251) 1252) 1253) 1254) 1255) 1256) 1257) 1258) 1259) 1260) 1261) 1262) 1263) 1264) 1265) 1266) 1267) 1268) 1269) 1270) 1271) 1272) 1273) 1274) 1275) 1276) 1277) 1278) 1279) 1280) 1281) 1282) 1283) 1284) 1285) 1286) 1287) 1288) 1289) 1290) 1291) 1292) 1293) 1294) 1295) 1296) 1297) 1298) 1299) 1300) 1301) 1302) 1303) 1304) 1305) 1306) 1307) 1308) 1309) 1310) 1311) 1312) 1313) 1314) 1315) 1316) 1317) 1318) 1319) 1320) 1321) 1322) 1323) 1324) 1325) 1326) 1327) 1328) 1329) 1330) 1331) 1332) 1333) 1334) 1335) 1336) 1337) 1338) 1339) 1340) 1341) 1342) 1343) 1344) 1345) 1346) 1347) 1348) 1349) 1350) 1351) 1352) 1353) 1354) 1355) 1356) 1357) 1358) 1359) 1360) 1361) 1362) 1363) 1364) 1365) 1366) 1367) 1368) 1369) 1370) 1371) 1372) 1373) 1374) 1375) 1376) 1377) 1378) 1379) 1380) 1381) 1382) 1383) 1384) 1385) 1386) 1387) 1388) 1389) 1390) 1391) 1392) 1393) 1394) 1395) 1396) 1397) 1398) 1399) 1400) 1401) 1402) 1403) 1404) 1405) 1406) 1407) 1408) 1409) 1410) 1411) 1412) 1413) 1414) 1415) 1416) 1417) 1418) 1419) 1420) 1421) 1422) 1423) 1424) 1425) 1426) 1427) 1428) 1429) 1430) 1431) 1432) 1433) 1434) 1435) 1436) 1437) 1438) 1439) 1440) 1441) 1442) 1443) 1444) 1445) 1446) 1447) 1448) 1449) 1450) 1451) 1452) 1453) 1454) 1455) 1456) 1457) 1458) 1459) 1460) 1461) 1462) 1463) 1464) 1465) 1466) 1467) 1468) 1469) 1470) 1471) 1472) 1473) 1474) 1475) 1476) 1477) 1478) 1479) 1480) 1481) 1482) 1483) 1484) 1485) 1486) 1487) 1488) 1489) 1490) 1491) 1492) 1493) 1494) 1495) 1496) 1497) 1498) 1499) 1500) 1501) 1502) 1503) 1504) 1505) 1506) 1507) 1508) 1509) 1510) 1511) 1512) 1513) 1514) 1515) 1516) 1517) 1518) 1519) 1520) 1521) 1522) 1523) 1524) 1525) 1526) 1527) 1528) 1529) 1530) 1531) 1532) 1533) 1534) 1535) 1536) 1537) 1538) 1539) 1540) 1541) 1542) 1543) 1544) 1545) 1546) 1547) 1548) 1549) 1550) 1551) 1552) 1553) 1554) 1555) 1556) 1557) 1558) 1559) 1560) 1561) 1562) 1563) 1564) 1565) 1566) 1567) 1568) 1569) 1570) 1571) 1572) 1573) 1574) 1575) 1576) 1577) 1578) 1579) 1580) 1581) 1582) 1583) 1584) 1585) 1586) 1587) 1588) 1589) 1590) 1591) 1592) 1593) 1594) 1595) 1596) 1597) 1598) 1599) 1600) 1601) 1602) 1603) 1604) 1605) 1606) 1607) 1608) 1609) 1610) 1611) 1612) 1613) 1614) 1615) 1616) 1617) 1618) 1619) 1620) 1621) 1622) 1623) 1624) 1625) 1626) 1627) 1628) 1629) 1630) 1631) 1632) 1633) 1634) 1635) 1636) 1637) 1638) 1639) 1640) 1641) 1642) 1643) 1644) 1645) 1646) 1647) 1648) 1649) 1650) 1651) 1652) 1653) 1654) 1655) 1656) 1657) 1658) 1659) 1660) 1661) 1662) 1663) 1664) 1665) 1666) 1667) 1668) 1669) 1670) 1671) 1672) 1673) 1674) 1675) 1676) 1677) 1678) 1679) 1680) 1681) 1682) 1683) 1684) 1685) 1686) 1687) 1688) 1689) 1690) 1691) 1692) 1693) 1694) 1695) 1696) 1697) 1698) 1699) 1700) 1701) 1702) 1703) 1704) 1705) 1706) 1707) 1708) 1709) 1710) 1711) 1712) 1713) 1714) 1715) 1716) 1717) 1718) 1719) 1720) 1721) 1722) 1723) 1724) 1725) 1726) 1727) 1728) 1729) 1730) 1731) 1732) 1733) 1734) 1735) 1736) 1737) 1738) 1739) 1740) 1741) 1742) 1743) 1744) 1745) 1746) 1747) 1748) 1749) 1750) 1751) 1752) 1753) 1754) 1755) 1756) 1757) 1758) 1759) 1760) 1761) 1762) 1763) 1764) 1765) 1766) 1767) 1768) 1769) 1770) 1771) 1772) 1773) 1774) 1775) 1776) 1777) 1778) 1779) 1780) 1781) 1782) 1783) 1784) 1785) 1786) 1787) 1788) 1789) 1790) 1791) 1792) 1793) 1794) 1795) 1796) 1797) 1798) 1799) 1800) 1801) 1802) 1803) 1804) 1805) 1806) 1807) 1808) 1809) 1810) 1811) 1812) 1813) 1814) 1815) 1816) 1817) 1818) 1819) 1820) 1821) 1822) 1823) 1824) 1825) 1826) 1827) 1828) 1829) 1830) 1831) 1832) 1833) 1834) 1835) 1836) 1837) 1838) 1839) 1840) 1841) 1842) 1843) 1844) 1845) 1846) 1847) 1848) 1849) 1850) 1851) 1852) 1853) 1854) 1855) 1856) 1857) 1858) 1859) 1860) 1861) 1862) 1863) 1864) 1865) 1866) 1867) 1868) 1869) 1870) 1871) 1872) 1873) 1874) 1875) 1876) 1877) 1878) 1879) 1880) 1881) 1882) 1883) 1884) 1885) 1886) 1887) 1888) 1889) 1890) 1891) 1892) 1893) 1894) 1895) 1896) 1897) 1898) 1899) 1900) 1901) 1902) 1903) 1904) 1905) 1906) 1907) 1908) 1909) 1910) 1911) 1912) 1913) 1914) 1915) 1916) 1917) 1918) 1919) 1920) 1921) 1922) 1923) 1924) 1925) 1926) 1927) 1928) 1929) 1930) 1931) 1932) 1933) 1934) 1935) 1936) 1937) 1938) 1939) 1940) 1941) 1942) 1943) 1944) 1945) 1946) 1947) 1948) 1949) 1950) 1951) 1952) 1953) 1954) 1955) 1956) 1957) 1958) 1959) 1960) 1961) 1962) 1963) 1964) 1965) 1966) 1967) 1968) 1969) 1970) 1971) 1972) 1973) 1974) 1975) 1976) 1977) 1978) 1979) 1980) 1981) 1982) 1983) 1984) 1985) 1986) 1987) 1988) 1989) 1990) 1991) 1992) 1993) 1994) 1995) 1996) 1997) 1998) 1999) 2000) 2001) 2002) 2003) 2004) 2005) 2006) 2007) 2008) 2009) 2010) 2011) 2012) 2013) 2014) 2015) 2016) 2017) 2018) 2019) 2020) 2021) 2022) 2023) 2024) 2025) 2026) 2027) 2028) 2029) 2030) 2031) 2032) 2033) 2034) 2035) 2036) 2037) 2038) 2039) 2040) 2041) 2042) 2043) 2044) 2045) 2046) 2047) 2048) 2049) 2050) 2051) 2052) 2053) 2054) 2055) 2056) 2057) 2058) 2059) 2060) 2061) 2062) 2063) 2064) 2065) 2066) 2067) 2068) 2069) 2070) 2071) 2072) 2073) 2074) 2075) 2076) 2077) 2078) 2079) 2080) 2081) 2082) 2083) 2084) 2085) 2086) 2087) 2088) 2089) 2090) 2091) 2092) 2093) 2094) 2095) 2096) 2097) 2098) 2099) 2100) 2101) 2102) 2103) 2104) 2105) 2106) 2107) 2108) 2109) 2110) 2111) 2112) 2113) 2114) 2115) 2116) 2117) 2118) 2119) 2120) 2121) 2122) 2123) 2124) 2125) 2126) 2127) 2128) 2129) 2130) 2131) 2132) 2133) 2134) 2135) 2136) 2137) 2138) 2139) 2140) 2141) 2142) 2143) 2144) 2145) 2146) 2147) 2148) 2149) 2150) 2151) 2152) 2153) 2154) 2155) 2156) 2157) 2158) 2159) 2160) 2161) 2162) 2163) 2164) 2165) 2166) 2167) 2168) 2169) 2170) 2171) 2172) 2173) 2174) 2175) 2176) 2177) 2178) 2179) 2180) 2181) 2182) 2183) 2184) 2185) 2186) 2187) 2188) 2189) 2190) 2191) 2192) 2193) 2194) 2195) 2196) 2197) 2198) 2199) 2200) 2201) 2202) 2203) 22

させ、主にその利益がはかられるべき土地保有者を減低させ、そのことは国富 *commonwealth* において決定的な重要性をもつものである。¹³⁾ 仲介業者の増大は、トレイドを減少させ、したがって国富をも減少させるというのである。のみならず、仲介業者そのものの存在が、ロックには好ましいものではなかった。ことに、買占人 *engrosser* は他のトレイド諸階級に害をあたえることが、きわめて大きいものであるから、排斥されねばならない。「かれらは貧しい土地保有者を犠牲にする。こうして、いまや市場は破壊され、借地農業者も現金に代へて帰宅したいと思つている。バターやチーズやベーコンそれに穀物などの売口がないために、買占人のいうままの時期にまたその額で、これらの自分の商品を売らざるをえなくなる。」¹⁴⁾ というのも、ロックには商品はその生産者から直接に消費者の手まで、できるだけ短いトレイドで送られることが、最も望ましいとの考え方があるからである。この点では「すべての奨励は職人 *artificer* にあたえらるべきであることは、あきらかである。事態をできるだけ秩序だてて、作る当人が自分の品物を販売し小売りするようにし、商品がかれらの家を出てから多くの人の手を経て最終購入者 *last buyer* にわたるといったことは、できるだけ避けねばならない。」¹⁵⁾ とともに、仕事そのものに貨幣があまり必要でないトレイドこそが国富にとって重要なものである。「ここでもまた、われわれはいかに製造業 *manufacture* が奨励するねうちのあるものかを、よみとることができよう。というのも、トレイドのうちのこの部門は、きわめて重大なものであるのに、最少の貨幣量でいとなまれるからである。もし、加工 *workmanship* が原料 *material* よりも価値が大きければ、ことにそういえるのである。なぜなら、労働者と職人によっておこなわれるトレイドには、かれらに支払われる五二分の一で充分であるのに、われわれの原料の土地生産物のトレイドには比較的多量の貨幣が必要だからである。」¹⁶⁾

このようにして、ロックがトレイド階級のなかでも、きわめて重要視しているのは、製造業者や職人であり、その理由はといえば、かれらの勤労や作業がその原料よりも価値が多いことであり、そのトレイドに貨幣量が少いことである。とともに、すでに先にふれたロックの文章のなかであきらかなように、土地保有者が「主にその利益が配慮さるべき」¹⁷⁾階級であり、国富に重要な影響をもつものであった。のちにのべるように、この階級は「第一生産者 first producer」¹⁸⁾であつて、自然の力をえて原料生産物を供給する基本的なものである。とすれば、トレイドの範囲は多様ではあるけれども、そのなかの中心はなんらかの形態で勤労によって生産にたざさわる階級のトレイドであり、これこそが国富の主たる担い手であることが、はつきりするであらう。いうまでもなく、生産物をつくるのは、ペティにみられるように、自然と勤労なのである。だが、ロックにきわめて特徴的なことは、くりかえしのべてきたように、このことはいわば表象としてしめされたものであつて、論理的には貨幣必要量および貨幣循環であり、貨幣のヴェールから、いわばこうした表象がかいま見えているといったほうが、真実であらう。このことは、先の叙述をその裏側からよむときわめてあきらかであつて、製造業者や職人の勤労や、作業を高く評価しながらも、評価の基準はどこまでも「トレイドが少額の貨幣でおこなわれる」¹⁹⁾からであつた。また、仲介業者が排斥されるのも「貨幣循環がより多く停滞する」²⁰⁾からであつた。このように、論理の軸としては、貨幣の流れから社会の経済構造が描かれているのだけれども、貨幣の流れはかならず生産物のトレイドに、しかも生産そのものがつかまれているといえるであらう。そして、この貨幣の経済循環の過程に国富の担い手たる初期ブルジョワジーの姿が、生き生きと描かれていたのであり、経済的自由主義がこの論理を根底において支えていたのではあるまいか。

- (1) Locke, J.: *ibid.*, p. 14. ロックが貨幣からトレイドへ進むというよりは、くりかえしのべているように、貨幣はトレイドと

相即して考えられてゐるのである。そして、チャイルドとちがつて、ロックはこの点ではマンに近い。

(2) Locke, J.: *ibid.*, p. 12.

(3)(4) Locke, J.: *ibid.*, p. 12. この点では、ロックとチャイルドとは立場は逆である。というのは、ロックにとって、法定利子引下げはトレイダーに必要な貨幣量を減少させ、したがってトレイダーをはばむからである。別のところでつぎのようについて。

「貿易の衰退は、急速に残余の産業を荒廃させる。そこで利子の引下げによって、自分の土地価格を上昇させようと考える地主は、自分が誤つていたことに気づくだろう。貨幣がなくなると、収益をあげる借地農業者も、地主の土地を購入する者もいなくなろう。」p. 14.

(5) Locke, J.: *ibid.*, p. 22. インライドの意味について、大塚久雄「重商主義におけるトレイダーの意味について」を参照(『古典派経済学研究』)。

(9) Locke, J.: *ibid.*, p. 21-2.

(7) Locke, J.: *ibid.*, p. 24.

(8)(9) Locke, J.: *ibid.*, p. 27.

(10)(11) Locke, J.: *ibid.*, p. 27. 経済学史学会で高木暢哉教授より、ロックは貨幣必要量であるとの教示をえた。

(13) Locke, J.: *ibid.*, p. 28.

(14) Locke, J.: *ibid.*, p. 25.

(15) Locke, J.: *ibid.*, p. 28.

(16) Locke, J.: *ibid.*, p. 29.

(17) Locke, J.: *ibid.*, p. 28.

(18) Locke, J.: *ibid.*, p. 74.

(19) Locke, J.: *ibid.*, p. 29. 貨幣の増大の要因をトレイダー増大に結びつけて理解する点については、小林教授の前掲論文を参照。

(20) Locke, J.: *ibid.*, p. 28.

六 インライドと地価・地代

われわれはこれまで、ロックが貨幣流通の過程においてブルジョワ社会の経済構造をいかにえがいたか、そしてこのなかで国富の抱い手はトレードそれも生産にたずさわる社会諸階級であることをしめしているということをみてきた。こうした考え方は、ロックの経済思想の基底に流れているものであつて、われわれはこれをさらに重要な経済学上のカテゴリーである、地価および地代にかかわらせて論じなければならぬまい。つまり、これまでの叙述にかかわらせていえば、経済循環の流れのなかで、地価および地代または租税が、どのように位置づけられており、また逆にそれにいかなるかわりをもつものを同時に追求しようと思う。

ところで、ロックの利子論の展開はこうである。利子は貨幣の不平等な分配から生ずるものであり、利子率は貨幣の貸賃価格であつた。このばあい、当時よく利子は地代と類似して考えられたが、ロックもこの例外ではなかつた。利子は貨幣の貸賃価格であるのと同じく、地代は土地のそれであり、土地の不平等な分配から発生する。こうして、ロックは利子を貨幣の価値から説明して、つぎのようにのべている。「貨幣には二重の価値があるが、その一つは、それが利子で年収入を生むことであり、ここに、貨幣は土地の性質をもっている（土地の収入は地代と呼ばれているのである。）¹⁾もちろん、貨幣は土地と同じではなく、はつきりちがつた性質をもっていることは、ロックもみとめてゐる。「ただ、ちがつている点はいへば、土地はその土壤があるいは肥え、あるいはやせ、その土地生産物の種類や質や売口がかなり多様であるから、量で定めた評価をすることができないのに対し、貨幣はたえず同一であり、その利子は全国どこでも同一種類の生産物をあたえる、ということである。」²⁾このように、土地が異質的であり、貨幣が同質的であることから、地代が不定であり利子が一定である、というだけではない。ロックはペティと同じく、土地は自然的に生産性をもつのに、貨幣は何物をも生産しないとして、つづけていう。「土地は自

然に人類にたいし、新しい利益のある価値物を生産するのに、貨幣は不毛で何物も生産しない。それは契約によつて、人間の労働の報酬である利潤を他人のポケットに運び入れるのである。」とすれば、利子は地代のような剰余価値の一形態ではないのだろうか。これにたいするロックの解答は、きわめてあいまいである。というのは、ロックは一方で利子の発生を貨幣の不平等な分配から説明するとともに、他方で貨幣貸付け資本家と資本使用者との分解を前提とし、後者のトレイドによる収益の再分配部分であるとみなしているからである。「私の貨幣は借り手の勤労によつて、トレイドのなかで借り手に六パーセント以上の生産を生むものである。それはちやうど、あなたの土地が借地農の労働によつて地代よりも多くの生産物を生みだすものとなるのと同じである。したがって土地に年地代が支払われるのと同じく、貨幣も支払をうける価値がある。貸付け業者は（もし、かれがそれを自分で使うと仮定すれば）年収益を生まないし、こうしてかれのうけとる六パーセントは他人の労働の果実であるようにおもわれるけれども、かれは土地を借地農に貸す地主とおなじだけ」他人の労働の収益の分前にあずかるのである。」⁴⁾とすれば、貸付け資本家はこの貨幣の収益たる利子を地代と同じく受けとることができるし、またそれは当然のことであろう。しかし地代といい利子といい、それらはいずれも他人の労働の再分配部分であり、真の富を作るのは、借地農であり、直接勤勞する商工業者であろう。「（まゑとおなじく地主が自分で土地を経営しないものとすれば）借地農の勤勞なしには、かれの土地はかれに何も生まないし、収益をあげないのである。」⁵⁾こうして、ロックは、表象的であり散発的であつたとはいへ、はつきり資本主義的富の原型をとらえていたといえるであろう。とともに、先にしめしたように、土地の生産性はこれら自然と労働との二つの源泉に求めていると考えられはしまいか。

ところで、われわれは地代についてはしばらくおき、ロックの叙述にしたがつて地代の母胎たる土地そのものの

価値について考察をすすめよう。すでによく知られているように、当時、利子率と地価との間に一定の関係があるということは、一般的にみとめられていた。「利子率は土地価値の購買年数の尺度⁶⁾」のようにみなされ、利子率が下があれば土地購買年数は逆比例して地価が高まるといわれていた。ことに、チャイルドは法定利子率を引下げることによって、地価を引上げるべく策し寄生地主の利益を擁護しようとしたことは、すでにあきらかにした。ロックはこれに反対して、経験的にも地価が法定利子率の変動と一致するものではないと、言明した。「経験にてらしてみても、エリザベス女王時代にもジェイムズ一世治下においても、利子が一〇パーセントであるとき、地価は十年購買年数ではなかった。」⁷⁾では、一体ロックはなにが地価を決定するというのだろうか。貨幣の価値を決める尺度と同じく、土地に対する需要と供給との関係が、理論的基準なのである。「売買されるすべての物の価格は、買手が多いか売手が多いかに比例して、騰落する。少数の買手にたいして多数の売手があるばあいには、いかなる手だてを構しようとも、その売り物は安くなるであろう。その反対に立場が代わって、売手が少いのを買手が多くなれば、同じ物でも直ちに高くなるであろう。この法則はすべての商品とおなじく土地にもあてはまる。そしてこのことが、イングランドにおいてある地方では地価が十七・八購買年数であるのに、利益の多い製造業のある他の地方では地価が二二・三購買年数もしているのかという理由である。」⁸⁾

このようにみると、またしてもロックは地価の需給説に立っているようにみえる。だが、ロックのそれは単なる需給説ではなく、さらにこの需要および供給は何によって決まるのか、その究極の要因まで深まるのであって、この点こそきわめてロック経済思想の個性をうきぼりにしているのである。では一体、土地の売手を増加させたり、あるいは売手を増加させるものはなんであろうか。ロックは地価を引下げる要因つまり売手を増加させ・買手を減

少させる原因を三つあげている。まず第一は「一般に不始末がおこり、その結果、借金がかさむこと」であらう。⁹⁾
 「商人が自分の収入のぎりぎりの生活をして、無益な出費で商人の財産を使い果たすか、または豊かになることがなければ、かれはめつたに土地を購入しようとは考えないであらう」し、「借金かふえれば、必ず人はまず借金に土地を抵当に入れ、そのあと自分の財産を売ることになるう。」¹⁰⁾さらに、「土地の買い手を減少させるもう一つのことは、土地財産の不確実で、悪い状態にあることだ。」¹¹⁾このばあいにも、必ず土地を買おうとする者はなくなるであらう。ところで、最後にではあるが、ロックが最も重要と考えている理由は、「トレイドの一般的衰退」である。
 「トレイドが一般に衰退すれば、人々が土地を購入しようという気持はそがれるであらう。なぜなら、このことによって一般的な貧困の脅威が生ずるのであって、この貧困はかならず、最初にそして最も重く土地のうえにのしかかるからである。不経済な地主に物を売る商人は、王国がかれのトレイドで利益をあげようとあげまいと、かれの商品を貨幣に代えて利益をうるだろう。そして商人は、その地代が下落しつつあるとみられ、トレイドの成行きにしたがっておそらく引きつづき下落しそうだと予測されるような土地に貨幣を投下するよりは、むしろ利益のあがるトレイドに投下するであらう。」¹²⁾

要するに、地価を引き上げる要因は売手が少く買手が多いことであり、さらにそうなるためには、トレイドが活潑におこなわれていることが決め手であった。ロックは勤労によって繁栄し貨幣を多く獲得する地域では、一般に地価が高いことをはつきり認識していた。こうして、ロックの経済思想のなかには、地価とトレイドとの間には緊密な関係のあることが、明白にしめされるであらう。ことに、さきの文面からあきらかなように製造業の発達した地方では地価はきわめて高いのは、トレイドが地価の高さの究極の原因だからである。ロックはそのいきさつを具

体的にのべてくれる。「その地方の土地は、すでにこの種の勤勉な繁栄せる人々の所有地となっており、かれらはそれを売る必要もなければ、その意志もない。このような製造業の発達した地方では、ある人の富は他の人の浪費から生ずるのではなく（人々が怠惰にも土地生産物に寄生している別の地方では、このことがおこる）て、人々の勤労が遠隔の地方から富の増大をもたらすのであるから、そこでは隣人を破滅させることなく、貨幣を生みだすであらう。そうして繁栄せる業者がうまくトレードで用いうる以上の利益をあげたとき、かれは次に買物を物色しようとするが、財産の監督できる近傍でそれを求めるにちがいない。」¹³⁾このばあい、ロックはその地方の土地を求めるといのである。もとより、ロックの理論の基礎には、土地の販路に対して相対的に貨幣量が増大することが、つまり土地に対する需要量の増加が地価の上昇の原因である、という考え方があつた。だが、貨幣量の増大の裏側には、表象としてではあれ、トレードそれもこのような製造業者など直接生産者の勤勉があり、これを支えていたということこそ評価すべきであらう。とすれば、トレードにたずさわる階級の勤労が、貨幣の流れにつつまれてあらわれてきた、といえるのである。

ところで、このようにトレードそれも製造業などのトレードをてこととして、地価の上昇したがって国富の増大をみちびきたすとともに、生産物の販路の拡大または土地需要の増大に求めているロックの二重構造は、地代について、きわめてはつきりするであらう。すでにわれわれは、地代の本質を利子に対比してきたが、ここでは地代率が利子率と関係づけられ、さらに地代がいかに上昇し下落するかという形で問われている。いうまでもなく、ロックの当面の時論は、チャイルドに反対して、利子率の引下げが地代の上昇をもたらすものでないことをあきらかにすることを目的としていた。「われわれは、地代の下落や、土地価格の下落を高利のせいにしてはならない。」¹⁴⁾利子

率は地代率を規定するものではなくて、むしろ利率は地代率に従っているものであらう。利率はこの意味で地代率よりも少し高いところで決まるとして、つぎのよういふ。「もしひとが貨幣と土地をたがいに比較するならば、おそらくできるだけの比率で六パーセントであらう。ところで、この六パーセントは二〇年購売年数の土地よりも少し高いのである。」¹⁵⁾ というのは、「土地よりもむしろ貨幣に、収益を生まぬ期間が多くなるときには長いからである。」¹⁶⁾ それに、貨幣は土地とちがつて持ち逃げされると「元も子も永久になくなる」¹⁷⁾ から、利率は地代より少し高くなければならない。

とすれば、利率より独立変数たる地代率はどのように決まるのであらうか。チャイルドでは、国富の象徴が低い利率であつたのに対し、ロックでは高い地代率である。「あなたの富の衰退のまぎれもない印は地代の下落であり、地代の引上げこそ国民の注目値するものであらう。なぜなら、利率引下げではなくて地代の引上げにこそ、土地所有者ならびに民衆の眞の利益があるのだ。」¹⁸⁾ このように、国富の衰退の印である地代の下落はどのようにして生ずるのであらうか。これにもいろいろの原因がある。まず、「土地が不毛となつて、生産物が少くなり、その結果、その生産物に対して受けとるべき貨幣が少くなる。」¹⁹⁾ これは土地そのものに原因があるのだが、生産物が生産されてもそれが売れるかどうかが問題である。すなわち、イングランドの煙草禁止などの事例にみられるように、「農産物の使用が止まつた」²⁰⁾ り、あるいは「別の商品がその商品の代替をした」²¹⁾ り、「他の所からより安い同一の商品が市場に供給された」²²⁾ り、「土地生産物に租税が課されて、借地農の販売品が安くなり、労働やかれの購買品が高くなる」²³⁾ からである。このように、生産面と市場面から農業生産物が考察され、最後にこれがさらにロックの貨幣量の増大および貨幣循環から統一的にとらえられ、一国の貨幣量がどれほど確保されるかという点にしばられる。

「国内における貨幣が減少するばあいである。なぜなら、貨幣量が減少しても、その必要や使用はへるわけのものでなく、その流通するあらゆる地方で同じように用いられ配分されるから、貨幣量が減少するだけ、この貨幣への権利をもつ各人の分け前は減少するのである。かれが土地保有者なら、生産物に対する貨幣が、労働者なら賃金が、商人なら仲介料が、それだけ少くなるのである。」とすれば、ロックの地代上昇の究極の原因は、商品価値の実現である市場の問題にあるとみられはしまいだろうか。「土地保有者の真の利益は、かれの穀物や肉や羊毛がよく売れて、大きい価格を生むことなのであって、実にこのことこそが土地所有者に利益をあたえる収益であり、また、これのみが地代を上昇させ、土地所有者を富ませるものである。」²²⁾

(1)(2) Locke, J.: *ibid.*, p. 33.

(3)(4) Locke, J.: *ibid.*, p. 36.

(5) Locke, J.: *ibid.*, p. 37.

(6) Locke, J.: *ibid.*, p. 37-8. ロックは利子率と地価との関係を算定している。

利子率 10% — 地価 10 購買年数

" 8% — " 12 $\frac{1}{2}$ "

" 6% — " 16 $\frac{2}{3}$ "

" 5% — " 20 "

" 4% — " 25 "

(7) Locke, J.: *ibid.*, p. 38.

(8) Locke, J.: *ibid.*, p. 39.

(9) Locke, J.: *ibid.*, p. 53.

- (1) Locke, J.: *ibid.*, p. 54.
- (2) Locke, J.: *ibid.*, p. 54-5.
- (3) Locke, J.: *ibid.*, p. 39.
- (4) Locke, J.: *ibid.*, p. 61.
- (5) Locke, J.: *ibid.*, p. 64.
- (6) Locke, J.: *ibid.*, p. 65.
- (7) Locke, J.: *ibid.*, p. 69.
- (8) Locke, J.: *ibid.*, p. 70.
- (9) Locke, J.: *ibid.*, p. 62.

七 地代と租税および貨幣量

ところで、この地代を下落させる諸原因のなかで、ぜひ注目しなければならないことは、地代の下落が「農業生産物への課税 tax」によっておこることである。が一体、これがなにを意味しているのであろうか。ロックにおける課税の経済政策的意味はきわめて重要で興味ある問題である。というのは、こうである。すなわち、租税は土地にかけるべきであるが、もしこれを農業生産物にかけると、必ず生産物が売れなくなり、これが地代の下落を引きおこすというのである。「租税はいかに工夫されようと、また直接にだれの手から取られようと、大きい財産が土地にある国では、どこのつまりは土地にかかってくるのである。」とすれば、一つにはすでにみたように、国富の担い手は土地保有者 landholder にあるのだということと、二つには、したがって土地保有者は土地への課税を他に転嫁できないと、忠告しているという点である。「土地に課された租税は土地保有者にとって、目に見え

てかれのポケットからそれだけの貨幣が出ていくものだから、つらいようにおもわれる。そこで、かれは自分の負担を軽くするために、いつもそれを商品に転嫁しようとする。だが、もしかれがこれをよく考え、諸結果を吟味するならば、この軽減も実は見せかけにすぎず、やがてかれはきわめて高い率でこの軽減をあがなうことになろうというものである。というのも、転嫁すれば、たしかに租税を直接かれ自身の財布から支払わなくてもよいのだが、かれの財布はその年の終わりに収入以上に貨幣の欠乏に見まわれるだろう。おまけに、地代が減少するのである。¹⁾ そのわけは、つぎの点にある。さきによつたように農業生産物がよく売れることが、つまりトレイドを確保することこそが、問題であろう。土地所有者の利益はトレイドいかんによつていうことが、つまり「借地農の勤勉 industry と節約 frugality」、それに土地生産物の市場性いかんにかかつているのである。主にも、ロックは社会総体の貨幣循環の過程に租税を地位づけている。もし、地方ジェントルマンが租税を他に転嫁するとすれば、消費者にいたるまでの生産物の価格に租税が入りこまざるをえない。このばあい、「第一生産者」たる土地保有者から最終消費者にいたるまでのトレイドの過程で、ロックはこの負担者を吟味している。土地以外に租税が負担させられるとすれば、たとえば「消費者にとつて四分の一の価格（租税分——引用者）が高くならざるをえない。……いま究極的に、この四分の一を支払わねばならぬ人はだれかを吟味しよう。……商人も仲介業者もこれを負担する意志も能力もないことは、あきらかである。なぜなら、もしかれが以前より四分の一の高い価格でその商品を仕入れるなら、それに比例した価格で売らうからである。」²⁾ ついで、「貧しい労働者および職人」はどうであらうか。かれらもまた負担できない。というのは、かれらは「まさしく手から口への生活をしており、もし食料、衣料および家具のすべてが以前より四分の一も高くつくなら、生存するために、賃金が物価につれて高くならねば

ならない。さもなくば、労働で自分や家族を維持できないから、破滅することになる。そのばあいには、土地はより大きい負担をうけることになるのである。³⁾ ついで、借地農はどうか。「もし、労賃が上昇した物価に比例して上がるなら、借地農業者は賃金にも他の物にも四分の一多く支払うのに、かれの売る穀物や羊毛は市場で前と同じ率であるか、あるいはより低い率で(なぜなら、それにかけられた租税によって人々は買いひかえるからである)あるからには、かれの地代を引下げざるをえまい。さもなくば、かれは地主への借金で破産し逃亡せざるをえない。そうなれば、土地の価値は下落してしまうのである。⁴⁾」だとすれば、「土地保有者のほかに、その年の終わりにだれが租税を負担する⁵⁾」というのであろうか。

そうだとすれば、租税は直接的に土地が負担すべきであり、「土地にかけられた租税は、けつして地代を下落せしめるものではない」⁶⁾のである。租税はトレイドの過程の農業生産物にかけてはならず、土地そのものが負担すべきだというのは、さきの理由のほかに、他のわけがあるのだろうか。つまり、土地そのもの、または土地所有者が特殊の生産性を持ち、国民経済上で特別の立場に立っているからであらうか。これについて、ロックはまたもやきわめて興味ある理論を展開している。すなわち、貨幣が減少するばあいに、トレイドの損失は必ず土地保有農におよぶことがこれであって、このことも経済循環の総過程についてのべられる。ちょうど、これは租税負担のばあいと表裏の關係に立っていて、おなじ論理の運びであらう。「もし、われわれの銚貨の(三分の一ほどの)相当部分⁷⁾が流出し、人々の間に平等に以前より三分の一の貨幣が減少すれば、人々は衣服にも他の物にも支出をへらし、以前より長い間これらを使い、支払いをへらすであらう。そこでもし織物業者 *clothier* はかれの商品の販路の不足をみてとるや、安く売るか、それとも全く売らないにちがいない。もし、かれが安く売れば、羊毛や労働に対する

支払いを減らさざるをえない。そして、労働者が賃金を少く受けとれば、かれは穀物、バター、チーズ、肉への支出を減らすか、それともこれらの物のいくらかを全くやめねばならない。そのいずれのばあいでも、羊毛、穀物、肉および土地生産物は下落し、こうして土地が大部分の損失を負担することになるのである。」ロックはこの理由を、ひきつづいて単的につぎのようにならべている。「ある商品の消費または販路^{（1）}が止まるなら、この停止はそれが土地保有者にいたるまで、つづくのである。そして、ある商品価格が下落しはじめるばあいにはつねに、その商品と土地所有者との間になん人の手が介在しようとも、かれらはたがいに報復しあい、ついに下落は土地保有者におよぶ。こうして、土地保有者の商品のあるものの価格が下落して、かれの収入が減り、はつきり損失となるのである。商品を生産する土地保有者とこれを消費する最終購入者とは、商業における両極である。土地所有者の手にある種の商品が下落しても、仲介ブローカーや買占人が術をろうして自分の利益のために価格を維持するから、最終消費者には下落とはならない、けれども、消費者に貨幣不足がおこるか欲望不足が生ずればいつでも、そして両者の間にそれをつり上げておくことを利益とする人がいないと価格は下がり、直ちに最初の生産者におよぶのである。」

このように、貨幣の減少はかならずその弊害が第一生産者たる土地保有者におよぶということは、つまり、貨幣の減少がトレイドの衰退と結びついてこの結果をひきおこすのである。農業生産物に対する課税または土地課税の転嫁が、トレイドの衰退により大きい弊害をひきおこすとしたのも、要は上の論理に基づいてのことであり、こうして土地への直接課税を提案し、地主への忠告をおこなったのであった。だが、このことは逆にいえば、土地保有者が一国の富を担う階級であるということになるのであり、ロックもそのことを明らかにした。しかも、土地保有者こそ第一生産者であるとするのは、かれの生産性をみとめていることであろう。事実、ロックは、「土地保有農

は、かれの土地と勤勉がもたらす商品、つまり普通の周知の物を市場に運ばざるをえないとすれば、売ることのできるかぎりの価格で売らざるをえない⁸⁾」とのべ、自然と労働の生産力を承認している。そして、これが直接生産者から最終消費者にいたる循環過程をとらえ、これをいかに合理化するかを問題としている点で、たしかに重農主義的な経済表ともみられうるのである。しかしながら、ここである土地保有農は、単に借地農に土地を貸して、この地代に寄生する地主ではなく、はつきりと自己経営する近代地主であろう。むしろ、前者については、借地農の利益を擁護しているといえよう。のみならず、この循環の中間にある借地農をはじめ製造業者や職人層は、それが貨幣の減少の弊害をうけないとか、租税を負担しないからといって、けっしてその生産性をみとめられないではない。「自然は世界のいくつかの地方で鉱山をあたえてきた。だが、その富は勤勉で儉約な⁹⁾ところにのみ存在する。富がだれのもとにおとずれようとも、勤勉な真面目の者にのみとどまるのである⁹⁾」このように、富の基礎は自然のみならず労働による。「借地農の労働がなければ（以前の¹⁰⁾ように土地所有者がそれをうまく経営しないとすれば）、かれの土地はなにも生産しないし、収益をうまないだろう。」われわれは、地価の上昇の根本的原因について、製造業の発達したことがあげられたことをみてきたし、奨励すべきは職人の加工業であることもあきらかにしてきた。むしろ、自然よりも労働に力点があるようにさえみえる。さきにものべたように「加工が材料よりも価値のあるばあいには、ことにそのトレイドは少い貨幣でいとなまれよう¹¹⁾」その反面で、商人ことに買占商人や仲買業者は、ロツクにとつてあまり好ましい階級ではなかった。もつとも、この時期にどれほど商業と工業との分解があったかは問題であり、商人が同時に製造業者である商工業者が一般的であったことも、考えねばならないであろう。だが、加工でなく単なる取引のための業者が、経済循環の過程に数多く介在することは、トレイドの発展をさまたげる以

外のなにものでもなかったのである。

そうだとすれば、ロックは生産的視点にのみ立っていたとみられるであろう。だが、その反面で、生産物循環はいわば理論の分子であって、ロックの経済思想の基盤たる分母はむしろ貨幣循環であり、その流れが理論の支えであった。いいかえれば、生産物はその生産過程からではなくて、それがいかに市場性をもつかが問題であった。したがって、「土地保有農の利益は、かれの穀物、肉および羊毛がよく売れて、大きい価格を生むことである。¹²⁾」とすれば、むしろ流通過程からみられており、これは重商主義思想に固有の考え方であろう。とすれば、このトレイْدはあきらかに価値の実現であり、商業であろう。というよりはむしろ、商業と産業は分解の寸前に統一されてつままれていたのであり、一体のものなのである。つまり、貨幣流通の過程のなかで勤労階級の利益と形勢がつつままれていたのである。のみならず、トレイْدを営むためには、一定の貨幣量それも貴金属貨幣が必要であった。いかに、仲介業者を排斥し、流通速度を高めても、トレイْدを媒介する一定の貨幣量が必要であった。しかも、これは外国貿易によってのみ可能である。「このことはわれわれの富を増大させ、イングランドへより多くの貨幣を流入させることによってのみはたされうる。¹³⁾」つまり、一方で勤勉によって国産商品を生産し、他方で「われわれの商品が支払うより少く消費することこそ、国民が富裕になる確実にして唯一の道である。¹⁴⁾」ここに、社会の生産過程は、どこまでもそれ自体には完結せず、外国貿易による貿易差額に依存していたのであり、そのはげ口を求めていた。これこそ、重農主義や古典経済学とは、根本的に異なる点なのであり、いわば重商主義的経済循環理論とでもいえるであろう。こうして、再びわれわれは初めにのべた貿易差額論に帰っていくのである。

このような二重の構造でロックの経済理論をとらえたうえで、再びチャイルドとの利子率論争にかえれば、こう

である。すなわち、ロックは国内および外国のトレードを円滑におこなうには、一定の貨幣量が必要であった。ここでは「利子率を四パーセントに引下げると、完全に貨幣量が変わって減少する。」¹⁵⁾したがって、一定の貨幣量をたえずブルジョワ諸階級の手に移すためには、いかなる利子率が合理的であるか、が問題であった。もとより、すでにのべたように利子率はなら貨幣量やトレードを規定するものではなく、逆に後者が前者を決定するのであった。それだからこそ、商人・製造業者や土地保有農・借地農の手に必要な貨幣量を流し、円滑にトレードをおこなわざせるものが、ロックの自然利子率の構想ではなかったのか。¹⁶⁾

- (1) Locke, J.: *Some Considerations of the Lowering of Interest and Raising the Value of Money*, p. 56-6.
- (2) (3) (4) Locke, J.: *ibid.*, p. 56-7.
- (5) Locke, J.: *ibid.*, p. 57.
- (6) Locke, J.: *ibid.*, p. 74-5.
- (7) Locke, J.: *ibid.*, p. 59.
- (8) Locke, J.: *ibid.*, p. 72.
- (9) Locke, J.: *ibid.*, p. 37.
- (10) Locke, J.: *ibid.*, p. 29.
- (11) Locke, J.: *ibid.*, p. 29. このようにみると、ロックは、単に農業生産にのみ力点をおいているのではなく、勤労一般であり、この点ではたとえ土地生産物から経済循環が始まったとしても、フランス重農主義よりもイギリス古典学派の系流に属する。
- (12) (13) Locke, J.: *ibid.*, p. 62. 生産物の価値実現の問題は、経済理論的に重大である。
- (14) Locke, J.: *ibid.*, p. 72.
- (15) Locke, J.: *ibid.*, p. 42. 利子率の問題は、ロック『経済論』の中心ではなかったとしても、当時の論争のなかで考えるとき、その出発点であり、終点であった、といえる。
- (16) ロックの「勤労と節儉」を中心とするトレード階級が、十八世紀へ移行すると、「勤労と奢侈」の啓蒙的人間像に転換する。

ここに、ロックと十八世紀の経済思想の断面があることは、いうまでもない。

八 『経済論』と『政治論』

これまでわれわれは、ロックの経済思想を重商主義政策と経済循環理論との二側面からとらえ、これら両者がからみあつて、利子、貨幣、トレイド、地代、地価あるいは租税などの経済的諸カテゴリーのたがひに関連するなかで、それらをつらぬき、そしてそれらが織りなして、ロック体系をつくりあげていることをみてきた。¹⁾ しかも、それらはなんらばらばらのものではなく、重商主義政策から出発して貨幣の流通過程にすみ、さらにトレイドそれも勤勞によつて支えられたトレイドの深みまでおり、それが国富の究極の担い手であることをしめしたうえで、再び貨幣量に、それも外国貿易による貿易差額のそれに求めた。このばあい、生産物の循環が分子としてあらわれ、その裏側で貨幣の循環が分母として考えられていた。貨幣流通が理論の基礎となつていることは、重商主義に固有の性格である。ロックもその例外ではない。十七世紀の時代の子として、ロックの経済論の基底は、どこまでも貨幣であつてケネーの生産物ではない。しかも、その循環過程の始点と終点には、外国貿易による貿易差額があつた。ここにも、重商主義的経済表の特色があつて、古典派のそれとの断続面がみられる。しかも、ここに重商主義政策と理論とのからみ合いがあるのであり、相対主義的ないい方をするならば、この未分離な形態こそロック思想を生きた時論たらしめていたのである。というよりはむしろ、政策と理論、それに貨幣の循環過程と生産物のそれとが、表裏をなしているものであり、より正確には重商主義的経済循環が国内の勤勞諸階級をつつんでいたのである。²⁾ すなわち、貨幣のヴェールにつつまれてではあれ、当時形成されつつあつた初期ブルジョワ階級の具体的な姿が、生き

生きとえがかれていたといえよう。そして、この側面こそ、ロックスが経済的自由主義の先駆者たりえた要素であつて、のちの古典派へのつらなる連続面となつたといえるであらう。³⁾

ところで、この二つの矛盾はロックスの思想全体についていえるのであつて、ことに『自然法論』から出発し、『宗教寛容論』をへて、『悟性論』を形成しつつあつたロックスの立場は、その根底においてこの経済的自由主義と相通づるものがあつたと、いえるであらう。しかしながら、ロックスのこの段階の『経済論』がそのまま『政治論』にいたるものではない。ロックスが重農主義や古典派とちがつた側面をもつていたことは、同時にロックスの思想の形成過程においても一つの断絶を画している。すなわち、『政治論』のなかで、自然と人間との物質代謝の過程を軸とし、生産または労働によつて生活資料を獲得し、それによつて私有財産権を確定したことは、あまりにも有名であつて、少くとも『経済論』には生産過程が表面にあらわれてはいない。この点にも、ロックスの経済思想はあきらかに同時代の『租税貢納論』の労働価値説とはちがつていたといえよう。くりかえしているが、ロックスは一面では以前の重商主義的地平にとどまつており、貿易差額による国内への貨幣導入または一定の貨幣量の確保を前提とし終点とし、国内諸階級における貨幣循環によつて経済社会を把握してしたのである。とすれば、たとえ生産物の循環がみられたとしても、それはどこまでも分子であつて、その分母には貨幣の流通過程があつたのであり、商品の需要の側からの分析であるだらう。したがつて、『政治論』の論理構成までには、この両者の関係が転倒され、生産過程の分析が分母におきかえられねばなるまい。この点の差異をみのがせば、『経済論』がそのまま『政治論』につながる、のみならず古典学派とは同一の地平に立つていたことになるであらう。もつとも、この点にかぎつてみても、『政治論』がすべて光であり、『経済論』は影であるというのではない。別のところで詳しくのべるよう

に、『政治論』そのものにおける生産過程の分析にしても、『経済論』によって投影されて、貨幣が労働とならんで生産力の衝動力であり、貨幣があつてはじめて自然状態からブルジョワ社会への進歩が可能となつた。のみならず、『政治論』には『経済論』にあるような客観的な経済社会の像というものはなく、経済の循環構造すらえがかれていないという点では、それはむしろ経済学の展開にとつておかれていたともみられるであろう。⁴⁾『政治論』における生産過程分析の視角は、労働ないし生産物の蓄積であり、『経済論』におけるような経済循環の分析ではなかつた。ここにも、おなじくロックの手になりながらも、これら二つの著書はその理論分析の地平には差異があつたといえるのである。

このように、『経済論』から『政治論』へ達する道はけわしく、そこに一つの断絶面がみられる。そしてこの面をのみ主張すれば、ロックの重商主義政策的な要素がうきぼりにされることにならう。しかし、同時に一見して矛盾しているようにみえる『経済論』と『政治論』は、その底で結びついており、『経済論』のなかで、貨幣循環の過程ではあれ、具体的に当時において躍動する初期ブルジョワジーの姿が、国富の担い手としてつかまれていたのではなからうか。

(1) ロックの『経済論』には、これらの諸問題のみならず、いわゆる「鈔貨論」がつけられ、それは相当大きい地位をしめている。だが、ここでは、浜林正夫氏の論文「ロック経済思想の社会的基礎」(商学論集、二二巻、六号)をあげるにとどめておこ。

(2) これまでの叙述からしてあきらかなように、ロックはトレードをおこなう諸階級、製造業者・職人・商人および土地保有者、借地農および土地保有者、一般の金融業者までもふくめて、広汎な階層を、一括して「勤勞する階級」とみとめていたことはあきらかであろう。このばあい、地主たる土地保有者としていたのではなく、むしろこれは初期ブルジョワ階級としてふくま

れていた。この点について、浜林氏前掲書七四ページを参照。「土地に対して支払われる年収の数を増やして土地の販売価格を高めることは、土地保有者にはなく、土地保有者でなくなろうとする人に利益をあたえる。もう土地をもっていない人々が多くの金を持ち、土地をもつ人々がかえって貧しくなるのである」。ロックが攻撃したのは土地所有をやめようとする階級であったことは、いうまでもなく、また、当時土地所有者と借地農との根本的な対立があったとは、いえない。だが、ロックが同じくトレイドを営むブルジョワ階級のうち、どの階級に力点があったかは、また別の問題であろう。

- (3) 小林昇「初期利子論史・労働価値論史上の一文獻」(商学論集、三〇巻三号)。小林教授はこの論文のなかで、匿名論文 *Some Thoughts on the Interest of Money in general and particularly in the Publick Funds* (1738?) がロックの利子論の立場を十八世紀のイギリス経済思想にうけつがれたものとして、評価されている。このばあい、ロックとこの匿名者の階級的立場の同一性が問題となっているのはもちろんであるが、『利子論』から『政治論』への理論上の転換をどうみればよいのだろうか。

- (4) 労働観もふくめて労働価値説は二つの類型に分けられる。内田義彦教授の分類により、一つは主体的自然法、他は客体的自然法とすれば、ロックの『政治論』は前者であり、ペティは後者であるといえはしまいか。『経済学講義』一〇五ページ。